稀代(きだい)の動物画家 薮内正幸ー誕生と活躍の歴史

藪内(やぶうち) 竜太(りゅうた)(薮内正幸美術館 館長)

薮内正幸とは

「薮内正幸」と聞いてピンとくる方は多くないでしょうが、絵本や児童書をはじめ、学術書から一般向け図鑑、広辞苑や世界大百科事典などの辞書類、さらには教科書や広告と携わった仕事は非常に多方面に及んでいるので、それらをご覧いただくと「あぁ、この本なら知ってる！」と思われるかもしれません。

生涯にわたって動物だけを描き続けた薮内ですが、実は画を学んだことはありません。完全な独学です。何より、描かれた動物や鳥たちには元となったポーズの資料はありません。薮内は写真等を見ることもなく、どんなシーンも描くことができました。そういったお話をしますとほとんどの方から「画も習ったことがない!? 何も見ない!? じゃあどうやって？」と聞かれます。そんな稀代の画家が生まれた背景を見てみましょう。

動物を描き続けた幼少時代

1940年に大阪で生まれた薮内は動物好きだった祖父の影響からか、幼少期より生き物に興味を持つようになりました。町中のいたる所にあった空き地で身近な虫を捕まえたり、やってくる鳥を見たり、時には野良犬を連れて帰ることもしばしば。また近所の天王寺動物園には祖父によく連れて行ってもらい、そこで初めて見る「本物」の動物たちに感動し、興奮していたようです。当時は今のようにTVで動物番組が見られるわけではなく、動物や野鳥のキレイな写真集があるわけでもありません。もちろんPCやスマートフォンでいつでもどこでも画像検索や動画が見られるのははるか後のこと。いくら好きな事でも情報に限りのある時代ですから、初めて「本物」を見た時の感動は今の子ども達のそれとは比べ物にならなかったと思います。カメラは到底手にできないですから、記録するには自ら描くしかありません。そこで帰宅後に紙を広げて先ほどの感動を残そうと試みるものの、何も見ずに描くのは至難の業。当たり前ながらうまく描けないわけです。好きなことなのに、あれだけ感動して興奮したはずなのにうまく表せないのはやはり悔しい。なぜうまく描けないのか、子どもなりに考えた結果が「ちゃんと動物の姿を覚えていない」からだ。例えばある時に大好きなライオンを見て上機嫌で帰宅するものの、紙に描かれたライオンは全く感動的ではない…そういった時、次に動物園へ行った際には開園と同時にライオン舎の前に行き、ライオンをじっと観察する。それこそ寝ていることがあっても、その日は「ライオンの日」と決めてきているので寝ているライオンをただただ見続け、そのまま閉園時間を迎える…。その集中力というか執着心は周りの大人を驚かせたようですが、さらに驚いたのは帰宅後に描いた画。そこには誰が見ても見紛(みまが)うことのないライオンが描かれていました。時間をかけ、本物をじっくりと観察をすることによって、先ほどのライオンが脳裏に焼き付けられたのです。その領域にまで達すると頭の中はライオンで満ち溢(あふ)れ、結果本人までライオンになりきって家の中を四つ足で歩き回っていたそうです。

今泉先生との出会いと交流

当然ながら動物に対する知識欲も半端なものではありませんでした。今と違って情報が溢れているわけではないので、動物にまつわることが記されたものを貪欲に集め、新聞からは写真が無い文字だけの記事でさえ丁寧に切り取りスクラップブックを作っていました。そんな情報に飢えていた小学4年生の時、一冊の動物の本を買ってもらいます。初めて手にする自分専用の動物の本、毎日飽きることなく頁(ページ)の端から端まで何度も読み返しました。薮内が2000年に60歳で死去した際、仕事部屋の机から手の届くところにその本があったことからも、いかに大切な宝物だったかがわかります。そして執筆者である今泉吉典先生に動物の疑問や質問を書き連ねた手紙を送るのですが、その方から丁寧なお返事をいただいたことが、後の人生を左右することとなります。

今泉先生からは他の哺乳類学者までご紹介いただき、手紙のやりとりは高校生になってからも続きました。驚くべきは、お相手して下さった学者の方々。いただいた手紙は今も残っているのですが、その一通一通に目を通すと、それぞれお忙しい身でありながら、子どもからの手紙にその都度真摯に対応して下さっています。決して子ども扱いをせず、一生懸命な相手には本気で向き合う、そんな大人との出会いは少年にとってかけがえのないものだったはずです。

高校3年生となり進学か就職か進路に悩んでいた時、今泉先生から「今度、世界一詳しい哺乳類の図鑑を作る予定だが、その挿絵を描いてみないか」とのお話しをいただきます。この頃には、理科の教師よりも動物に関する深い知識を持つようになり、手紙を送る際には必ず画を描き添えていました。その上達ぶりは学者の方々も驚嘆するほどだったようです。世の中にこんな図鑑があればいいなと思うものを親よりも尊敬する学者の方が作る、その挿絵を自分が描くという、夢にも思いつかないようなお話をいただいたのが、卒業式まで1ヶ月を切った2月でした。そして高校卒業と同時に上京、図鑑を出版予定の福音館書店に入社することとなります。

福音館書店入社後

入社後は、手紙をやり取りしていた『世界一詳しい哺乳類図鑑』の執筆者である今泉先生が勤務する国立科学博物館に日参、そこで骨格標本のスケッチに明け暮れます。制作予定の図鑑はすべての哺乳類を網羅するような、全10巻以上のボリューム。そこに登場する哺乳類の多くは日本では飼育例も無く、研究途上で写真はおろか資料もほとんどないような種ばかり。つまり描くにあたっての参考資料が無いわけですが、今泉先生が言うには「骨格がわかっていれば写真が無くともどんなポーズでも描ける」。そこで様々な種の骨格標本を朝から晩まで描き続けました。食事の時間さえ惜しみ、物を食べながら海外の文献の模写を繰り返すという、寝ている以外は動物の

画を描き続ける生活が2年ほど続いたようです。今となってはその間に何万点のスケッチをしたのかわかりませんが、この期間が修行であり下積みの時間だったと言えます。当時を思い起こして薮内が言った言葉は「あの2年間は楽しかった。朝から晩まで動物の画を描いていられたんだから」。

『世界一の哺乳類図鑑』出発と挫折

入社から2年以上が経ってようやく図鑑の挿絵に着手したものの、見たこともない、写真も無い動物たちを描かねばならない。当然何度となく描き直しをさせられていたようです。1巻当たり何百カットも挿絵の入る図鑑でありながら、その1カット1カットが描いてはダメ、描いてはダメの繰り返し。それでも1年以上をかけてようやく最初の一冊分がまとまり、改めて今泉先生に見せに行くと「よく頑張った」と言って下さり、全てのカットを最後まで見終えると、再び「よく頑張ったね」。そして「じゃあもう一回最初から描き直そうか」。20代前半の若者が毎日朝から晩まで画を描き続ければどんどん上達してしまうようで、「最初の方と最後ではタッチが変わっている」とのことでした。

そんなことを繰り返しながらも5年近くかけてようやく3巻分の画が仕上がる頃には画力も安定し、描き直しをすることもほとんどなくなりました。本人の言葉によれば「この頃が人生で一番幸せだった」そうですが、何とそのタイミングで諸般の事情により出版が見送られることとなってしまいます。経営上のやむなき判断だったようですが、その図鑑のために上京し、そのために骨格を描くだけで2年を費やし軌道に乗ってきてこれから、という時に！本人の落胆ぶりは相当なもので、一時は退社して大阪へ戻ることも考えたようです。しかし新たに、福音館書店が得意とする子ども向け絵本を手掛けることとなります。福音館書店は「子どもには本物を見せなければならない。子供騙(だま)しということはあり得ない。騙せるのは先入観を持った大人だけだ。初めて外の世界を知る絵本に描かれているものが不正確であって良いはずがない」といったスタンスで絵本を制作していました。

絵本作家としてデビュー

児童書の出版社として今は名の通る福音館書店がなぜ世界一詳しい哺乳類図鑑の制作を計画したのか。それは子ども向けの本とはいえ誤りはもちろん、大人の都合の良い解釈、偏見(へんけん)で動物を扱っていないか、それを編集者がチェックするのに適した図鑑が当時は無かったのです。質の良い絵本を作るために世界一の図鑑を作る、そのために無名の高校生に白羽の矢を立て数年かけて育て上げるという、現在の時間尺度からすればちょっと信じられないような話です。学者に徹底的に鍛え上げられて、世界にも充分に通用するまでになった動物専門の画描きは、福音館書店が子どもたちに与えたい絵本を製作するのに最適な人材でした。こうして動物の専門知識を持ち、かつ内部構造から熟知した絵本作家が誕生したのです。

1965年に絵本デビュー作となる『くちばし』（図1）以来、翌年には130刷を超えるベストセラーの『どうぶつのおやこ』、1969年にシリーズ刊行物『かがくのとも』の創刊号である『しっぽのはたらき』、1977年には今もブック・スタートに選ばれることの多い『どうぶつのおかあさん』などが出版され、動物画家のほか絵本作家の肩書も持つようになりました。同時に『冒険者たち ガンバと十五ひきの仲間』などの物語や教科書、図鑑、辞典などにも挿絵を描き、1973年の愛鳥キャンペーン新聞広告（サントリー株式会社と団法人日本鳥類保護連盟：いずれも当時の名称）では新聞一面に展開される野鳥の迫力あるペン画（図2）を発表しました。このように死去する直前まで、ただひたすらに動物や野鳥を描き続けた人生でした。

図1. 絵本デビュー作である『くちばし（ピアンキ 文 / 田中 友子 訳 / 藪内 正幸 絵; 福音館書店 1965年）』表紙.

図2. サントリー愛鳥キャンペーンの新聞広告.

好きこそものの上手なれ

当館でも薮内の子ども時代の画を展示することがあり、それを見た方々は「やはり天才の人は子どもの頃から違うのね」と必ずおっしゃいます。しかし私からすれば、薮内は決して画描きとして天才ではないと思っています。天才ではないけれど子どもの頃からあり得ない数の画を描いてきました。先の科学博物館でのエピソードでもわかるように、寝ても覚めても画を描き続けていました。図鑑など高価でまだまだ買えなかった中学高校の頃には、手元に置いておきたい一心で何冊もの図鑑の全頁を模写しました。30歳で福音館書店を退社してからはフリーのイラストレーターとなりますが、仕事に疲れて休憩をする際にはその辺の紙に好きな鷲や鷹を描いていました。筆休めに、筆を取っていたのです。

それだけの数を描いたら誰でも上手になるでしょう。一つのことに時間を使えば下手なわけがありません。しかし、普通はそれだけの数をこなすことができないと思います。延々と飽きずに続けられないと思います。でも、薮内は描き続けました。どれだけ描いても苦ではなかったようです、好きなことだから。だからあえて天才という言葉を使うなら画描きとして天才ではなく、天才的に動物が好きだったんでしょう。その好きな動物を少しでもカッコ良く描きたいから何度も描き続けた…稀代の動物画家が生まれた背景には、「好きこそものの上手なれ」を地でゆく少年の姿がありました。